様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 ２４ 日現在

機関番号：１４５０１
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2012～2013
課題番号：２４６５３１３７

研究課題名（和文）テーマ型コミュニティ創成による切れ目のない支援の実践と効果に関する研究

研究課題名（英文）Practice and Efeects of Seamless Support Based on Theme-oriented Community

研究代表者
伊藤　篤（ITO, Atsushi）

神戸大学・人間発達環境学研究科・教授

研究者番号：２０２２３１３３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,200,000円、（間接経費）　　360,000円

研究成果の概要（和文）：地域の福祉課題解決の方法として，テーマ型コミュニティ（地縁ではなく特定のテーマに集う人々）による実践がある。本研究では，こうした実践の効果を，子ども家庭福祉，障害共生，震災復興支援という領域にかかわって検討した。子ども家庭福祉領域では「長期間かつ主体性を高めること」が，障害共生領域では「参加者間で生じる葛藤への向き合い方」が，震災復興領域では，「被災地区の住民とボランティアとの交流から生まれた取組」が課題解決に向かうことが明らかとなった。総括的には，単体のテーマ型コミュニティを活性化するアプローチと複数のテーマ型コミュニティを活性化させるアプローチの併用が豊かな学びにつながるという仮説を得た。

研究成果の概要（英文）：As one of the measures for resolving local problems about residents' wellbeing, we can give a theme-oriented community, where local people interested in a particular theme come together. We discussed the effects of this kind of measure focusing the fields such as chikd and family welfare, inclusive society, and revival of earthquake-stricken district. It was inducated that the programs of long-term and identity-enhancing in the field of child and family, positive attitude toward the conflicts caused by the participants in the field of inclusion, and the initiatives produced by the intercourse between earthqake suffereres and young voluntery workers in the field of revival are to lead to the solutions. To synthersize these results, a new hypothesis is obtained that combining the approaches both activating one theme-oriented comminity and activating several theme-oriented ones could produce quality learning and resolutions of local tasks.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会福祉学

キーワード：テーマ型コミュニティ

１．研究開始当初の背景

福祉あるいは教育などの領域における様々な課題を抱える個人や家庭あるいは集団の支援を考える際，各自のライフステージやライフサイクルに伴って変化するニーズに加え，各自が置かれている状況に伴うニーズを考慮する必要がある。こうした時間軸と空間軸という統合的な視点を備えた支援を「切れ目のない支援」とするならば，その支援の展開にあたっては，従来からの知識を与える・便宜を図る・経済的に援助するといった方法以外に，特定の課題意識（テーマ）に関心のある当事者と支援者が参画する「場」の提供，すなわち「テーマ型コミュニティ」により，相互がエンパワメントされることによって，支援の内実が豊かになるという可能性が想定できる。

２．研究の目的

本研究では，代表者と研究分担者が所属する組織（神戸大学人間発達環境学研究科・ヒューマンコミュニティ創成研究センター）が運営する地域サテライト拠点および大船渡市におけるムーバブル拠点などにおける「テーマ型コミュニティ」実践が，「切れ目のない支援」となり，豊かな学びと課題解決に向かうための条件として求められる仮説の導出を目的とした。

３．研究の方法

育児支援の（子ども・家庭福祉）領域，障害児・者インクルージョンの領域，震災復興支援の領域において「テーマ型コミュニティ」のアクション・リサーチを遂行することによって，当事者および支援者の学びの内実と課題解決に向けた志向性において高まり・広がり等が見られるかどうかを検証した。

４．研究成果

（１）育児支援領域では，サテライト拠点において，①地域の父母と０歳児が参加するセミナー，②拠点を利用し始めて日の浅い利用者（母親）対象の交流会，③女性のキャリアを学ぶセミナーを実施した。①については，終了後の質問紙調査により，子どもが１歳児台になって以降も同様のセミナーに参加したいとする希望者は多く，これまでの参加者以外のニーズを持つ子の年齢の違う仲間への受容度も高いことが明らかとなった。②については，交流会参加後半年後の追跡調査によって，交流会で知り合った者どうしがサテライト施設以外の場で交流を深めること，交流会で知り合った人ではない人への積極的な働きかけが生じること，将来は自分も支援的な立場で社会貢献したいと思うことなどが明らかにされた。しかし，③については，終了後の質問紙調査により，同じニーズを持つ母親同士のセミナーであれば，再度参加したいとする者が多く，受容度や広がり・深まりは見られなかった。①は年間７回の長期プログラム，②はエンパワーメント（主体性）を高めることを重視したプログラム（単発）であったのに対し，③は講義と就業のノウハウを伝達することを重視するプログラムであり，その違いが結果に影響を及ぼしたと考えられる。

（２）障害児・者インクルージョン領域では，サテライト拠点において，多様な市民の活動に障害児・者が参加する場面をつくりだし，そこにおける多様なコミュニケーションの創出の可能性，合理的配慮の生成過程を観察し検討した。人々の集まりを創り出すテーマとしては，「発達障害」「子育ての困り感」「アート・表現」「遊び」などであった。特に「遊び」を通して多様な市民の間での交流が観察され，また多様な市民の間のコミュニケーションが開かれていくことによって合理的配慮が市民の間に

浸透していく様子も観察できた。ただし，その過程においては市民間等の間に葛藤がみられ，さまざまな問題が生起した。それらの問題に対する態度や向き合い方が，コミュニケーションが開かれていくか，閉ざされていくかの重要な岐路になっているという認識も得ることができた。サテライト施設において,「育児支援領域」と「障害児・者インクルージョン領域」が協働することによって，それぞれ異なるターゲットグループの混淆が生じ，多様なコミュニケーションの回路が生じたという点も，この研究の大きな成果であった。複数の問題群の協働は，機能的に分断された社会の中で相互に接点の少なくなっている市民間に，新たなコミュニケーションを生み出す契機となる。この事実は，より多くの実証を経て普遍的な視点で提起していくべきことだと考えるに至っている。

（3）震災復興支援領域では，ムーバブル拠点として神戸大学と連携関係にある大船渡市赤崎地区公民館において，震災復興支援ワークショップを実施した。このワークショップは,「赤崎復興隊」として組織化された一つのコミュニティを支援するものであるが，複数のテーマ型コミュニティを形成し，その相互作用で復興のまちづくりを進めようとするものである。赤崎地区の住民と神戸からのボランティアが交流しつつ,「被災跡地活用」「仮設住宅交流企画づくり」「こども復興隊支援」「移転地活性化アイデアづくり」のテーマに分かれ，それぞれが事業を企画化し，さらに，そのコミュニティが相互に交流することを枠組みとしている。2012 年からほぼ毎月実施してきたワークショップのふりかえりやアンケート調査の結果，他のコミュニティとの関係が深い人ほど，自分のテーマについての考察や得られた知見が豊かであることがわかった。この実践の中でわかってきたことは，単体のテーマ型コミュニティを活性化するというアプローチと，テーマ型コミュニティ間の相互作用を活性化させるアプローチの併用が，参加者の学びをより豊かにするということである。

以上の 3 領域における成果を整理すると，子ども家庭福祉領域では「長期間かつ主体性を高めること」が, 障害共生領域では「参加者間で生じる葛藤への向き合い方」が，震災復興領域では,「被災地区の住民とボランティアとの交流から生まれた取組」が課題解決に向かうことが明らかとなった。総括的には，単体のテーマ型コミュニティを活性化するアプローチと複数のテーマ型コミュニティを活性化させるアプローチの併用が豊かな学びにつながるという仮説を得たことになる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 2 件）

① 伊藤篤・川谷和子, 地域子育て支援拠点・ひろば型における早期ペアレンティング講座の意義－0 歳児のパパママセミナー受講者の自由記述を手がかりとして－, 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 査読なし, 7 巻 2 号, 2014, 125-131

② 津田英二，あなたと私の間にある学びをどう描くか, 社会教育学研究, 査読なし, 50 巻 1 号，2014，95-97

〔学会発表〕（計 2 件）

① 津田英二，社会的包摂と福祉教育・ボランティア学習，日本福祉教育・ボランティア学習学会第 19 回大会, 金城学院大学, 2013 年 11 月 17 日

② 津田英二，あなたと私の間にある学びをどう描くか, 日本社会教育学会第 60 回研究大会，東京学芸大学，2013 年 9 月 27 日

６．研究組織

(1)研究代表者

伊藤　篤（ITO Atsushi）
神戸大学・大学院人間発達環境学研究科・
教授
研究者番号：２０２２３１３３

(2)研究分担者

松岡　広路（MATSUOKA Koji）
神戸大学・大学院人間発達環境学研究科・
教授
研究者番号：１０２８３８４７

津田　英二（TSUDA Eiji）
神戸大学・大学院人間発達環境学研究科・
准教授
研究者番号：３０３１４４５４

朴木　佳緒留（HOUNOKI Kaoru）
神戸大学・大学院人間発達環境学研究科・
教授
研究者番号：６０１０６０１０

末本　誠（SUEMOTO Makoto）
神戸大学・大学院人間発達環境学研究科・
教授
研究者番号：８０１６２８４０